

近世文藝思潮攷

中 村 幸 彦 著

岩 波 書 店

近世文藝思潮放

昭和五十年二月二十八日 第一刷発行 ©

定価二千百円

著者 中村幸彦

発行者 岩波雄二郎

発行所 株式会社 岩波書店
東京都千代田区一ツ橋二丁目五番五号

三陽社印刷・牧製本

落丁本・乱丁本はお取替いたします

目次

一	幕初宋学者達の文学観……………	一
二	石川丈山の詩論……………	三
三	文学は「人情を道 ^い ふ」の説……………	五
四	俳趣の成立……………	九
五	虚実皮膜論の再検討……………	一六
六	文人服部南郭論……………	一五
七	柳里恭の誠の説……………	一九
八	五井蘭洲の文学観……………	二一
九	隠れたる批評家——清田僊叟の批評的業績——……………	二九
十	読本初期の小説観……………	三五

十一	上田秋成の物語観……………	二六三
十二	小沢蘆庵歌論の新検討……………	三〇六
十三	滝沢馬琴の小説観……………	三三〇
十四	景樹と子規……………	三七六
後	語……………	四〇一

一 幕初宋学者達の文学観

1

幕初とは近世徳川幕府時代の初めの意である。徳川幕府時代即ち江戸時代の思想界に終始君臨して、その指導的役割を果たしたのは、儒学である。儒学は過去の中国でも然りであった如く、江戸時代でも、唯に倫理の軌範としてのみでなく、人世万般の理論と実際面にも関与指導した。文学も文学思想も、その例外ではない。儒者の文学観、儒学界の文学思想は、各時期の文学思想の中心となり、国学者、歌人俳人、戯曲小説の作家の文学観にも反映している。また儒者は、思想家兼文人、研究家兼教授であつたのが常態で、その文学についての意見の発表は、文学本質論から漢詩文の作法、古典の研究評論に及んでいる。のみならず、日本古今の諸様式 작품을論ずる場合も少なくなかつた。よつて文学論と一言に称しても、甚だ多様であつた。且つ儒者儒学界の文学観は、必ずと云つてよく、中国のそれぞれの世の思想家文人の文学観の影響を受けている。よつて比較文学的な配慮なくしては、十分な理解には到らないものである。しかも江戸時代の我

が国の儒学は三百年の間、また幾變転して、特異な展開をとげたこと勿論であって、儒者儒学界の文学論も、一様に論ずることが出来ぬ。しばらく、以上の如き様相の一つの見本として、近世初期新しい文学觀の中心となった宋学者の文学論をうかがって見ることにする。

2

徳川幕府が、日本の政治を担当して、その文教政策の指導原理に選んだのは、当時の中国は勿論、朝鮮その他亞細亞の各地でも、そして日本でも漸く流行し初め、云わば一つの世界学であった宋学であった。この儒学の一派は、後述する如き、宋学自体の性格に恰好な、当時の日本の社会的条件の下において、短日月に、それまで日本の思想界を支配して来た仏教にとって替って行った。幕府が林羅山らを招聘して、この政策に参画させたのは勿論、諸大藩でも、尾張の堀杏庵、紀伊の那波活所、水戸の辻端庵の如く、その派の学者を政治と教育政策に参画させたし、進歩的な思想家は、大先輩の藤原惺窩は勿論、朝山意林庵、山崎闇斎の如く、仏教を捨てて、この学に参じ且つ鼓吹した。幕府や諸藩の封建的権力の活用や、この政策に参加した林羅山などの関係者の熱意もあって、士農工商あらゆる身分、そしてその身分内のあらゆる階級の末端までも、この教が滲透して行った。徳川家康らがこの思想を文教政策中に採用したのは、彼の先輩の信長、秀

吉らの為政者が、その統制に苦しんだ仏教、更には切支丹に匹敵する世界的思想体系であり、宋代近世社会を理論づけたこの学が、幕府が想定する近世封建社会の理論的支柱たり得ると考えた大きな原因があつたからである。⁽¹⁾しかし社会一般が、魅力をここに感じたのには、他の原因もあった。中世思想界に支配的であつた浄土教的仏教は、厭離穢土欣求浄土の現世否定、人間否定の思想であつた。長い戦乱の後に、実力によって近世の平和社会で実権を握つた支配者層の武士や、経済力を持つ上層町人などは、現実を謳歌し、人間の力を信じたはずである。既に室町期から現世の幸福を願う気分が、一般民衆の中にも、次第に醗酵して来ていたが、儒学はまさしく、藤原惺窩が、

自_レ仏者_二言_レ之、有_二真諦_一、有_二世間_一、有_二出世_一。若_レ以_レ我_レ觀_レ之、則_レ人倫皆真也。未_レ聞呼_二君子_一為_レ俗也。我恐僧徒乃是俗也。聖人何廢_二人間世_一哉。(惺窩先生行状)

と述べた如く、現世の人間尊重の学であつた。この点が、時の人心に合致したのである。中世仏教の神秘主義にかわる宋学の合理主義も亦歓迎されたが、仏教から儒教へ思想転換をするには、宋学が、中国に於けるその形成時に仏教と交渉することあつて、形而上学的要素を持っていた、禪的思考に馴れていた当時の日本の知識人にも理解し易く、入り易かつたことも間違いない。当時として為政者にも一般人にも焦眉の急であつたのは、長い戦時の悖徳と、戦後につきものの利

那的な享樂の風潮を立て直す実践倫理の準則であった。しかし仏教が持っていたかつての道德的指導力は、腐敗した当時の經流に望むべくもなかった。これを提供したのも宋学であった。『東照宮実記』附録は云う。

惺窩に至りはじめて宋の濂洛諸儒の説を尊信し、躬行実践をもて主とし、遍く教導せしより、世の人やうやく宋学の醇正にして世道に益あることを知れるに至れり

とあるに徴しても明らかであるが、それより数多い近世初期の教訓書が、その拠り所を宋学に求めたことが、最もよくこの間の事情を物語っている。のみならずこの新思想に対して、伝統的な思想即ち神道界仏教界でも、進歩的な人々は習合の態度をとった。度会延佳の神道に於ける『易经』、新しく信奉者を集めた新禅宗、盤珪禅に対する『大学』の影響なども既に論じられている。世に云う三教一致思想は、我が国でも早く中国より輸入されていたが、近世初期では、それまで一致の中心であった仏教に替って、宋学が、その位置についたことが特色である。史家は、近世初期を啓蒙時代と称するが、その啓蒙思想を主導したのが宋学であると云ってよい。従ってこの啓蒙時代の文学思想界を主導したのも、中世の仏教に替った宋学であったのである。

幕初の儒者達が読んで、その影響をうけた宋学の書籍については、『羅山林先生集』の附録にある羅山年譜慶長九年の条の、彼の既読書目や、その随筆『梅村載筆』(ただし、この方は羅山が全部見たか如何は不明)に見える。更に紅葉山文庫の『御文庫目録』につけば、羅山の晩年頃では、宋学の主要書は、悉く見ようと思えば見られたと思われる程輸入されていた。今、羅山やその頃の人の読んだものの中で、宋学書の示す文学論の本筋を求めれば、次の三筋であった。

一は載道説。その主要の文は次の如くである。

文所_レ以載_レ道也。輪轅飾而人弗_レ庸、徒飾也。況虚車乎。文辞芸也。道德実也。篤_二其实_一、而芸者、書之美則愛。愛則伝焉。賢者得_二以学_一而至_レ之。是為_レ教。故曰言之無_レ文、行之不_レ遠。

……不_レ知_レ務_二道德_一、而第_二以_二文辞_一為_レ能者、芸焉而已、噫₇弊也久矣。(周敦頤『通書』)

とあり、『二程全書』十八では韓愈の文学を評して「退之晩年為_レ文、所得処甚多。学_レ本是修_レ德、有_レ德然後有_レ言。退之却倒_レ学了」と述べて、更に、

今之学者有_二三弊_一、……一溺_二於文章_一。二牽_二於訓詁_一。三惑_二於異端_一。苟無_二此三者_一、則將何_レ帰。必趨_二於道_一矣。

と云う。韓愈の如く、儒学を堅持した人に対してすら、その文章を重んじたことについて、きびしい批判を下したのである。この周子・程子の説は、朱熹にもそのまま伝わって、処々に発言が

あるが、『朱子語類』卷八には、

這文皆是從道中流出。豈有之反能貫道之理。文是文、道是道。文只如喫飯時下飯耳。

若以文貫道、却把本為末、以末為本可乎。

の語があり、『鶴林玉露』卷六にも有名な逸話があつて、朱熹自らは詩人として遇されることを嫌つたのである。この風は朱子学者の間に普遍的であつて、文章研究家として、『文章正宗』の編者真德秀すら、

夫士之於學、所以窮理而致用也。文雖學之一事、要亦不外乎此。故今所輯以明義理、切實用為主、其体本於古、其指下近乎經者、然後取焉。否則辭雖工、不録。と云つてゐる。

二は、勸善懲惡説。朱熹の『詩經集伝』の序に見える処である。

或有問於予曰、詩何為而作也。予応之曰、人生而靜天之性也。感於物而動、性之欲也。夫既有欲矣、則不能無思。既有思矣、則不能無言。既有言矣、則言之所不能尽。而發於咨嗟詠歎之余者、必有自然之音響節奏。而不能已焉、此詩之所以作也。然則其所教者何也。曰、詩者人心之感物而形於言之余也。心之所感有邪正、故言之所形有是非。惟聖人在上、則其所感者無不正、而其言皆足以為教、其或感之之雜而所發、

不_レ能_レ無_レ可_レ択者。則上之人、必思_レ所_二以自反_一、而因有_二以勸_二懲之_一、是亦所_二以為_レ教也。……使_下夫学者即_レ是、而有_二以考_二其得失_一、善者師_レ之、而惡者改_レ焉。是以其政雖_レ不_レ足_二以行_二於一時_一、而其教實被_二於万世_一。是則詩之所_二以為_レ教者然也。……於_レ是乎、章句以綱_レ之、訓詁以紀_レ之、諷詠以昌_レ之、涵濡以体_レ之、察_二之情性隱微之間_一、審_二之言行枢機之始_一、則修_レ身、及_レ家、平_二均天下_二之道_一、其亦不_レ待_二他求_一、而得_二之於此_一矣。

とある。この間に孔子が『詩経』を刪した所以を述べ、『詩経』の経たる所以は、「善を陳べ邪を閉ぐの意、尤後世能言の士も能く之に及ぶ所にあらざる」所であるとしている。従つて後世の詩も亦、勸善懲惡の意を以て詠じるべく、鑑賞すべきものであることとなる。

三は玩物喪志の説。語は『書経』の「旅獒編」に見えるが、説は『二程遺書』卷十九に収まる。後にそれを収めた『近思録』卷二の「為学類」から引いて見る。

問、作_レ文害_レ道否。曰、害也。凡_レ為_レ文、不_レ專_レ意則不_レ工。若_レ專_レ意則志局_二於此_一。又安能_二与_二天地_一同_二其大_一也。書曰、玩_レ物喪_レ志。為_レ文亦玩_レ物也。……古之学者、惟務養_二情性_一、其他則不_レ学。今為_レ文者、專務_二章句_一、悅_二人耳目_一、既務_レ悅_レ人、非_二俳優_一而何。曰、古者学_レ為_レ文否。曰、人見_二六經_一、便以謂_二聖人亦作_レ文、不_レ知_下聖人亦抱_二発胸中所_レ蘊_一、自成_レ文耳。所謂有_レ德者必有_レ言也。曰、游・夏称_二文学_一何也。曰、游・夏亦何嘗秉_レ筆、学_レ為_二詞章_一也。且

如_下觀_二乎天文_一、以察_二時變_一、觀_二乎人文_一、以化_下成天下_上、此豈詞章之文也。

同じ処に「明道先生、以_二記誦博識_一、為_二玩物喪_レ志_一」の語も見える。宋学の精神修養実践第一の方法から発して、工を務める文学を否定する方針なのである。以上の三説については、引用の書にも様々の註釈書もあり、中国でも日本でも、その点を詳説したものもあるが、悉く省略に従う。そして宋学を奉じた人々でも、この三つの筋が、時代により論者の学風により、具体的には様々の色合を示して出現するのであるし、今儒学の問題を離れても、文学を論ずる普遍的にして基本的なものを、この三つの説は持っているとも考えられる。例えば唯物史観による文学論などは、一種の載道論であり、古今を通ずる仏教文学なども、勸善懲惡論であるなどのことは全部顧ないことにして、以上の三説が幕初の儒者達に如何に影響し、如何なる論が展開されているかを検討して行くことにする。

4

藤原惺窩の文学観の大略は、『藤原惺窩集』の解説に説く処があるが、今、以上述べる立場によって見れば、次の如くなる。勸懲説については、

余亦写_二一時之懷_一、雖_レ然当_二其感發興起之時_一、不_レ覺氣象志意、有_二自不_レ可_レ掩_二所_レ養之邪正_一。

……若知^レ有^ニ邪正之所^ニ在、則詩書之為^ニ詩書^一也。『惺窩先生文集』卷之六「与^ニ順知^一詩并序」
とあって、詩の發生については、賛成している如くであるが、『文集』中にも、勸懲の論を大呼する處の認め難いのは、彼の性格からして政治や教育の實際に関する發言が少く、自己修道の生涯を堅持した為に、對外的な言及が、自ら少かつた為でもあつたろうか。よって、玩物喪志の誠を心としていた如くに見える。

宋播芳四冊還了。大抵四六文辞等、雖^レ非^下志^ニ道學^一二者之所^ニ必、古今之變亦因^レ焉。不^レ知非^ニ翫^レ物喪^レ志。如何。『文集』卷之十一「与^ニ林道春^一」

とは、文学に於て美文に耽ることに就いての、自誠である。更に記誦博識に關しても、

知^レ好^ニ藏書^一。而不^レ知^ニ其所^ニ以樂^一、既知^レ樂、而不^レ知^ニ其所^ニ以敬^一、則翫物喪志而已。『文集』卷之七「戸氏家藏書跋」

などの反省を持っていた。従つて載道説についても、

況道外無^レ文、文外無^レ道。足下立^レ志已如^レ此。彼鳳洲者不^レ足^レ多焉。『文集』卷之十一「与^ニ林道春^一」

などと、その立場に於ける發言をしている。宋学に於ける文学論の三つの立論に、惺窩がかなりにすなおに同調し得たのは、彼の思想中に中世以来の歌論の素地があつたのも、その原因であつ

たろう。云う迄もなく、中世では、狂言綺語も讃仏乗の縁とする、仏教的勧善懲惡主義が一般的であつた。狂言綺語説を裏がえせば玩物喪志説であり、讃仏乗の縁の論は、一種の載道説とすれば、宋学の主張もそのまま肯定されることとなつたであらう。ただし惺窩に於ては、仏教に拘るものは現実人間否定の文学であつたが、儒学の漢詩文は、皆真なる人倫に關するものであつたことを忘れてはならない。惺窩は冷泉歌学の家に生れた環境と天性の詩人的性格の持主でもあつた。宋学の文学論を採用したが、文章の必要性を否定したのではない。載道の具としての文章、殊に日本人の漢文の為に多大の心を用いた。『文章達徳録綱領』を製し、門人吉田素庵をして、その編集を命じたと云う。今この書について云々する場でないが、日本近世漢文学史上に於ては、後世から草昧期などと称されたこの時代に、早くもここに着目した惺窩の見識は、その第一頁に特書さるべきものである。朝鮮の姜沆はその書に叙して、「学者不知作文几格之故」の著であり、「作」文根柢也、千回万変、万状千態、備録而無余」と云い、惺窩門下第一の文章家と目される堀杏庵も文章に益あることを縷々と述べた後に「育華夷之英才」「有補於天下後世者也」と序している。よつて、三筋の文学論の行過ぎに就いての反省も、まゝ見出される。

漂海録全三冊、備博觀。此等之書、非急務、雖然、処事變、窮理尽性、亦在于此。豈不爲學者之一助乎哉。（『文集』卷之十一「与林道春」）

1 幕初宋学者達の文学観

此等之書、雖^レ若^レ無^レ益^ニ於正學^一、又遊^レ芸之一。而芸之与^レ徳、礼書暫分言^レ之。然亦古人以爲^レ非^ニ三途^一、所^ニ以其感^レ之者、元所^ニ以其寂^ニ者也。(同)

の如くである。そして更に積極的には「行有^ニ余力^一、以学^レ文」の語をもつて、連歌をさえも許しているのである。後述する崎門学派の如くに、嚴重に宋学の教条に服従することのみをしたのではない。

しかれば、惺窩の宋学的教条を認めた上での、文学観の結論は如何になるかとなれば、内容の精神面の重視となる。『文集』巻之四「答^ニ若州羽林君^一二首」の前詞の中で、

氣象渾厚、与^下近時以^ニ絺章繪句^一、取^ニ悅於人^一者、大有^ニ逕庭^一。自^レ非^下播^ニ弄造化^一、超越宇宙、才氣豈臻^レ之哉。予以為翫物喪志、非^ニ風雅立教之意^一。吁止矣、天下喪^ニ斯文^一、而以^ニ羽林君^一為^ニ木鐸^一乎。

と、若州羽林君こと木下長嘯子のその和歌が、この言葉に真に該当するものであったかはともかくとして、斯文が、翫物喪志のそしりを超越して存在する為には、その精神の渾厚にあるとしていたことを知る。その表現内容精神の帰結として、「簡淡平易、心有^レ誠而不^レ感^レ人者未^レ有」などの言葉をも残した。また詩に参ずるは禪に参ずる如くであると述べたり、

詩之於^レ歌、同工異曲、如^レ飄^ニ錦繡^一。背面俱華、詩而仙。禹稷易^レ地者歟。有^下以^ニ周詩^一為^ニ吾

家渥槃經二者上。『文集』卷之八「書正徹老人親筆倭歌後」

など、歌道と信仰の一致を説いた、例えば心敬、正徹的な考え方に賛成するのも、彼のこの思想重視の考え方に基づくものであつたらう。よつてその反対に、唯に巧をのみてらう詩文を嫌つて、「次韻梅庵由己」并序『文集』卷之三の序詞で、日本の今の人の詩の評価と、古代の詩の評価と一致しない点に不審して、古今同一でなければならぬと論じては、

今時之詩、小巧淺露、而多為用事屬對、所牽強、失優游不迫之體、卻謂古人之詩甚不工。蓋知鏤氷文章之為工巧、而不著水塩味之為密藏二者也耶。

と、述べるのも、同じ論旨から發したものである。又彼は陶淵明の人となりと詩文を愛し、林兆思の「桃源寓言」を見て、「陶淵明、有志於我道也」と述べたりしている。ただし、ここにも、朱熹が淵明を評して、

作詩、須從陶柳門庭中來、乃佳不如此、無以發蕭散沖澹之趣、無由到古人佳處。と云つたり、『鶴林玉露』卷六「朱文公論詩」と題して、

詩者志之所之、豈有工拙哉。亦觀其志之高下如何耳。是以古之君子、德足以求其志、必出於高明純一之地。其於詩、固不學而能之。至於格律之精粗、用韻屬對比事遣詞之善否、今以魏晉以來諸賢之作、考之。蓋未有用意於其間者。而況於古詩之流乎。